『零円の生命』

人工 工人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『零円の生命』

【Ｎコード】
Ｎ０８１９Ｏ

【作者名】
人工　工人

【あらすじ】
ゾンビ小説の企画に参加させていただいた作品です。
急場製作なので自分でも見るに耐えなかったり。

（前書き）

本当はラノベ一冊分くらい書く予定の設定を流用してしまったので、酷い出来かと思います。
まあ、どうせ文量増やしても文才がないわけですが。
この作品を日頃お世話になっている某御方に捧げます。

0. 『比良坂の夜から』

――これは、ボクが出会ったとある“死なない化け物”の話。

始まりは去年の秋の出来事だった。
夕暮れの帰り道。
都会から離れた、とある寂れた町の外れ。
そして――彼岸と此岸の境界線。
呼び方はなんでもよかった。
ただ、単純で鬱屈した事実が一つだけ。
前日までの小春日和も既に面影はなく、冬休みも始まるより少し前。
血も凍るような寒風が吹く、人気のない夜に。

少年は随分と呆気なく――殺されたのだった。

そのとき確かに、どこかで誰かの断末魔が響いた。
或いは、何かが産声を上げたのだろうか。
しかし、どちらにした所で。
――全ては、此処から始まった。

1. 『七原の廃墟にて』

「立てよオラ！！」
日本の某県、七原市の町外れ。開発計画の頓挫により、放置された廃墟群。
そこでは一人の少年が、複数の不良達に殴る蹴る等といった暴行を受けていた。
「チッ、シケてやがる。ロクに金もねーのかよ」
唾を吐き捨て、奪い取った財布の中身を取り出す不良。
事の発端は、少年が彼らと廃墟の入口で鉢合わせした際の、「――おいテメェ、見ねぇツラだな」という、ベタな一言によるものだった。
場所は廃墟に向かう道の途中。少年が偶然通った道は、不良グループの溜まり場にでもなっていたらしい。
「ハッ、調子に乗ってこんなトコに来てっからこうなんだ、よッ！！」
喋りながら足を振り上げ、少年は壁までゴロゴロと転がるように蹴飛ばされる。不運な少年は、呻き声と共に口の端から赤い血を流していた。
「……ッが、はっ……」
――実は現在、問題が一つある。
それは、さっきから他人事のように語られている少年が、他ならぬボク――藤宮詩原であることなのだった。
「なんで……こんなことに……？」
「テメーがムカつくからに決まってんだろうが！！」
顔に付いたピアスと金髪茶髪を振り乱し、下卑た表情で下卑た笑い声をあげる不良達。
あまりに皆が皆同じような動きを繰り返すので、この不良達は実は一つの群体なのではないだろうかとすら思えてくる。
ああ、眩しい。夏の日差しが容赦無く照り付けている。
「おいオマエ……こんなんじゃ金が全然足んねえんだわ。オレ達全員のメシ代にもなんねえし。わざわざこんなメンドイ事してるって

のに割に合わないワケ。これはオマエが責任とんなきゃなあ？」
「知らねーよ働け」
……なんて言おうとするはずもなく、ボクは黙ったまま壁際に吊るし上げられた。
胸倉を掴まれているので、首が絞まって呼吸が不自由極まりない。あまりの労働環境の悪さに、酸素の奴が今にもストライキを起こしそうだ。
つまるところ窒息寸前。
貧血のように視界がぐらつく。熱射病とかが、こんな感じになるらしいが。
……考えていると、不良はまたニヤつきながらこう言った。
「金がねぇなら持って来いよ。家から持ってくりゃあいいだろ？」
親からでも良いからくすねて来い、という意味だろう。それに対する返答なんて決まってる。
ボクはコイツらとは戦えない。
だから、ボクの言葉なんて初めから決まっていて。
選択肢なんて、どこにもありはしないのだから――
「……んじゃヨロシク。明日また来てくれるかなぁー？」
「……それは出来ません」
「――――――ああ？」
ピクリ、と。ボクを吊るし上げていた不良のリーダー格らしき金髪が、露骨に顔をしかめる。
「だってボク、親もいなければ家もないし」
「……テメェ……！」
嘘をついてからかわれていると感じたようだ。金髪が左ポケットから取り出したのは――冷たい光沢を放つ、刃渡りの短い鈍い銀色の刃物――つまり、ナイフ。
右手でボクを壁に押さえ付けたまま、その切り裂くための武器をボクに振るって――

「――視えた。刃物は左手。狙いは脇腹。三秒以内に弾いて、風太くん」
「――ああ。動くんじゃねーぞ、腕を落とされたくなけりゃあな」

聞こえてきたのは、不良と間違うような声。
それでも声の主が不良じゃないと分かったのは、その言葉が不良に向かって放たれていたからだ。
声を掛けられた事により、内容に関わらず動きを止め、聞こえてきた方を見遣る金髪。
と、その瞬間。廃墟の出入口から“見えない何か”が空を裂いて迫り、不良の手にあったナイフを弾き飛ばした。
「なんだ……今の……？」
原因を目撃したらしい不良。その目線の先には。
手刀を斜めに構えた金髪の少年と、やや年上に見える同じ色の長髪をした少女が。
まるで不良達に喧嘩を売るように、直立していた――
「姉貴、下がってサポート頼む」
少年が口を開き、
「うん、あんまり無理はしないで」
姉と呼ばれた少女も口を開く。二人に武器はないが、それを不利にすら感じていないようだ。
「……ゴチャゴチャと……ウゼーんだよ！！！！」
理解不能な展開の連続に、頭の中が限界に達したのだろうか。唐突に叫んだ金髪は、右ポケットからナイフを取り出して斬り掛かる。
……予備があったのか。
「なら、テメェが黙ってやがれ」
呟きながら手刀にした腕を振るう少年。しかし、明らかに間合いが遠い。このままでは無意味な隙を晒すことに――！
しかしそれは杞憂でしかなく、何事もないかのように振るった手刀から放たれた衝撃波のようなものが、たやすく“ナイフの刃を切

断した”。
「――――！！」
それだけでは収まらなかったのか、不良の左頬までも薄く裂き、血が流れ出した。
何が起きたかを正確に把握できた訳ではないだろう。しかし不良は声にならない悲鳴をあげて後ずさると、仲間を連れて一目散に逃げ出した。
というより、下っ端達は先に逃げ出していた。本能レベルの危機察知能力が働いたらしい。無言の行動に見えたが、恐怖で歯の根が噛み合わずに震えるばかりだった所為であろう事は容易に推測できた。
下手にとんでもないモノを目の当たりにしたせいで、自分をごまかせなくなっていたようだ。本来ならば、何かの見間違いだと自分を納得させることができていたかもしれないのに。
「この辺りは、あまり一般人が立ち入らない方がよろしいですよ……貴方、お怪我は？」
未だ思考が冷めない内に、ボクと同年代であろう少女が話し掛けてきた。
「いえ、おかげさまで。ええと、そちらは……」
助けてくれた少年の側へ視線を投げやる。
「ああ、この子は私の弟で三角（みすみ）ふ……」
「――姉貴、関係ない奴に言う必要はないだろ。コイツになんか興味はないしな」
当の本人が姉らしき人の言葉を遮り、背中を向けて立ち去ろうとしている。
……性格悪っ。
姉が後に続き、頭を軽く下げていった。
「……あ、あの――」
引き留めようとしたボクを無視して、風太というらしい少年が最後に立ち止まると「――能力もない人間なんかが、こんな所にはも

う来んなよ」とかなんとか意味の分からない事を言い残して去っていき、やがて誰も居なくなった。
……面倒な事にならなければ良いけど。

その誰も居なくなった廃墟でボクはポツリと呟く。
「――でも、そういう訳にはいかないんだよね。ボクにはボクの、目的がある」
彼らの名前も、本人が遮らなければボクが遮っていた。聞く必要がなかったのではなく、聞く訳にはいかなかった。
「――――」
携帯を取り出してから切っておいた電源を入れると、掛け慣れた番号へと電話を繋げた。
「――ああ、真里亜？」

2. 『そのしばらく後で』

見渡す限りの廃墟。
電話を終えたボクは、再びこの地区の探索を行った。
探しモノ。ボクが、わざわざこんなに遠い街にまで来た理由はそれだった。
「……さすがに、昼間からは見つからないか」
この街で見かけたという情報を偶然聞いて居ても立ってもいられなくなり、次の朝には電車を何本か乗り継いでこの街に来ていた。
だがしかし、“アレ”が動くとすれば基本的に夜だ。今やたらに動いても徒労に終わる可能性が高い。現に、手掛かりを見つける事もできない内から厄介事に巻き込まれていたのだから。
「……念の為に一度、市街地まで出てみようかな」
そう思いたったのが二十分ほど前。

無駄とは思いつつも、人気のある町外れ辺りを散策した所だったのだが。
「……公園かぁ」
人気のない場所というのも、散策場所の条件に含まれる。見れば、公園には広さの割にブランコと砂場、鉄棒と滑り台……後はベンチくらいしかなく、不自然な箇所にやたらとスペースが空いている。過保護な親達の弊害か……等と考えつつ、足を休めようと少し立ち入ってみた。
自らが取ったその行為の生産性のなさにうんざりしながら、ベンチに腰掛けようとして……先客がいることに気づいた。
座っていたのは幼い少女。とても外出時に用いるものとは思えないゴスロリ服を着て、金髪に青い目をしたその子は、無表情に微動だにせず、まるで人形のように静かにそこに在った。
「――お兄さんは、何の為にこの街に来たの？」
まただ。また話し掛けられた。何故皆、ボクに関わってくるのだろう？　昔聞いた“ルール”通りに、誰にも関わらないように動いていた。にも関わらず、このザマはなんだ？
まるで、因果率を弄られているかのようにやること為すことが上手くいかない。だからこそ、こんなに簡単に人間離れ常識外れの存在に出会っている。
「それは多分――もう、遅いのよ、きっと」
――考えている事が読まれた。思考に割り込んできた少女の声は、ボクを驚かすには充分だった。
話し掛けながら隣に座る。
「……君、心が読めるの？」
それは些細な思い付き。
当て推量の夢想妄想の極致。
ただし、そういった突飛な発想、突拍子もない想像こそが、なんの皮肉もなく真実、的を射ているということもある。
「……わかる？」

「だったら、本当は聞くまでもないんだよね、それ」
「……ええ、正解よ。だって私、《超能力者》、だもの」
「……へえ、最近じゃ割と珍しいよね」
それを自称する二人組に、さっきも出会ったような気がするのだが。まあ、今はあまり関係ないか。
「お兄さんは、なんで今自分が私と会話する気になっているのか不思議でしょうがない――そう思っている。自分は普通の他人とは話してはいけないはずなのに、何故言葉を返してしまったのかが分からない。……違う？」
「ああ……そっか、何か引っ掛かってたのはそれか」
良かった、何か大切な事を見落とした気がしていたのだ。
「変なお兄さん。普通なら、もっと私を怖がるのに」
やはり心を読んでいる。少女の言う通り、心を読まれるのは意外と不愉快になるものらしいとは初めて知った。
まあ、こんなことばかり聞き続けてきたのならば、年齢不相応な中身に成長したのも分からなくはないが。
まあ、超能力者はまだ現実的でもある。ボクが探しに来たのは、多分それを遥かに越えるほどに有り得ないモノだからだ。
「ええ、気をつけてね、お兄さん。今、この街には《不死》が居るらしいし」
「《不死》……どんな奴かな」
「さあ。人外の怪物なのは間違いないし、廃墟みたいな人気のない所で何人か喰われちゃったみたいよ？　人の思考を流し聞いてたら聞こえたの。気をつけてね」
ボクはベンチから立ち上がりながら言う。
「うん、ありがとう。ところで、君の名前を教えてくれないかな。ボクは藤宮詩原っていうんだけど」
「レイカ。そう名乗っておくわ」
この少女は気づいている。ボクの秘密にも、目的にも。だから今の情報を求めていると分かったのだろう。

「さっき言った《不死》を手に入れる為に、色んな奴らがこの街に集まって来てる。幸いにも感知能力者がまだ居ないから気づかれてはいないけど。競争になる前に手早く終わらせたら良いと思うわよ」
何か腑に落ちない。どこかが不自然。違和感。焦燥。
「そこまで分かってて、なんでボクに情報を渡すの？」
専門家でも雇って、不死を得ようとするのが普通だろうに。
「身の安全の為、かな。私は興味ないもの。それに、私の姉様と兄様が《不死》を捜してるわ。頼みもしない私の為に、ね」
そんなことだけ言われても分からない。だってボクには、人の心なんて読めないのだから。
「ごめんなさい、失言だったわね。詩原さんは詩原さんのやりたいようにすればいいの」
「それも……そうだね。それじゃあ」
偶然出会った幼い少女に別れを告げる。
「じゃあね、レイカちゃん。縁があったらまた会おう」
背を向ける少女。
「ええ、また会いましょう。……その時まだ、生きていられればね」
酷く物騒な言葉を残し、少女は静かに去っていった。
「ああ、全く」
ボクも反対向きに歩き出した。空は既に夕暮れ。ここからが、ボクの目的地。
そして。
「――そっか、そういうことか」
別れの挨拶を交わした後でようやく気づいた。
ボクが彼女に話し掛けることができたのは、彼女から“この世離れ”した死の気配を感じたからだという、それだけのことに。

3．『比良坂市の事務所』

不良達に絡まれた直後。
ボクは自宅代わりの事務所に居るであろう保護者代わりの人物に、移動用の金を調達する為に電話を掛けた。
コールは一瞬。
『……一体全体どこに行ってたのかしら。ねえ、詩原クン？』
聞こえてきたのはまだ幼げな少女の声。
「ごめん、マリア。少し、気になる事があってね」
『……“復讐”、でしょう？』
「うん」
『分かった、誰か人を送るわ……といっても、玄浄のオジ様は個人的な用で出てるし……あの《魔女》――ジギタリスのヤツも、昨日大きい依頼回しちゃったから居ないし……ゴメンなさい詩原クン、そっちに回せるのは深遠（ふえん）だけみたい。それもすぐには難しいわ。ワタシがここを離れる訳にもいかないし……』
「……ありがとう。ホントにごめんね、勝手なことして」
『何言ってるの、ワタシとアナタの為だけに創った《零零零（アイン・ソフ・オウル）》なのよ？　二番目に偉いアナタの為に、一番偉いワタシが集めたチームなんだから。気にせず使いなさい。分かったかしら？　“我が従者”』
「“しかと心に、我が主人”（イエス、マイマスター）」
『よろしい。……でもね、詩原クン。本当にアナタ一人であの“蟲（レギオン）”をどうにかできるの？』
それは、ボクの目的。夢。願望。願い。宿願。そして――呪い。
だから――
『あの時はワタシですら仕留め損ねたし、だからこそ“アレ”を相手取る為に仲間を集めたのよ？　本当に――』
「――できるよ。いや、やらなくちゃいけないんだ。それに――“今回はボクがいる”から」
『……そう、そうね。ならせいぜい頑張りなさい。骨は拾ってあげ

られないけど』
「分かってるさ。大丈夫、上手くやるよ」
『不良にも手出し出来ないアナタが？』
「“だからこそ”、だよ。……分かってる癖に、真里亜ってば」
『フフッ、そもそも私の所為なんだものね。冗談よ、冗談』
「それじゃ、お願いします」
『ええ、抜かりなく――』
そこまで言って電話は切られる。
さあ、後はその時に備えようか。
そうしてボクは、街をうろつき始めた。

4．『再び、廃墟区画へ』

七原の廃墟群。
赤い陽が照らすその場所で、ボクは昼間の二人組と出会った。
いや――正確には、一人だ。昼間には確かにいた筈の弟君が見受けられない。
一方姉は、あまりに憔悴しているようだった。走り回っていたらしく息も絶え絶え、何故かは分からないが非常に急いでいたようで、ボクを見つけると同時、つかみ掛かるように問い詰めてきた。
「ああ、その節はお世話に……」
「なんで貴方はこんな所に居るんですか！？　危ないからここには近寄らないようにって言ったじゃないですか！！」
いや、そうは言われても……。
「……いえ、すいません取り乱して。私の名前は三角水季（みすみ みずき）といいます」
「あ、ボクは藤宮詩原です。よろしく」

ようやく自己紹介。既に残りページ数がヤバイ……って何言ってんだろう。
「あの、それで、この辺りで小さな女の子を見ませんでした？　私達の妹なんですが……」
「……」
いやいやまさかね。
「それって、君達と同じで金髪で、容姿端麗で、目が青くて、お人形みたいで、歳は小学生くらいで、なのに妙に大人びてて、微妙にセンスを疑うようなゴスロリとか着てたり……」
「わ、私のセンスに失礼なこと言わないでください！！」
「ああ、あれ水季さんのセンスだったんですね……」
そういうことなら間違いないかな？
「その子なら街中の公園近くで、見かけましたけど」
「ホントですか！？　ありがとうございます！　えーと、藤宮さん。ここは危ないですし、帰られた方が……」
なるほど、レイカちゃんが言っていたのはこの事か。
「そうもいきません。ボクも、アレを捜してこの街に来たんですから」
「……っ！！　そうですか、貴方も不死を求めているんですね。……何故？　やっぱり、貴方も永遠の命が欲しいっていうの？」
明らかに訝しんでいる目を向けられるが、それは受け入れられない相談であった。
「ボク……ですか？　いいえ、ボクも、“興味なんてありませんよ”」
それは本当。とてもじゃないが、魅力なんて感じない。むしろ気持ち悪いだけだ。本当に気持ち悪くて、冗談じみて醜悪だ。
「貴方まで妹みたいな事を言うのね……なら、なぜあんな化け物なんかを？」
追い掛けているのか、と問われたので答えることにした。ボクにメリットなんかないけれど、《不死》を求める者達には、言ってお

かなくてはいけない事だろう。

「――うん、ボクは……《不死》を殺す」

5．『三角風太の視点から』

病院を抜け出し、オレと姉貴を追い掛けてこの街に来たらしい我が愛すべき妹を捜しているさなか。オレは今、廃墟の屋上にいた。

金髪の不良にこの場所に連れて来られたのだが、昼間の仕返しだろうか？　顔なんて覚える気にもなかったから分からない。円周上には十人程度の不良の群れ。

ハッ……群れ――そう、群れだ。頭が少しばかり足りない獣の群れ。

こいつらの学習能力のない脳は、数で囲めばいいという結論しか導き出せなかったらしいな。

唯一評価出来る部分は、皆が皆、それぞれに武器を持ち合わせているところだ。道具を使うなんて、人間らしくて実にいい。尤も、束にしたってオレの能力一つにすら敵うものではない物ばかりだが。

駐車場として建てられたんだろう。コンクリートが剥き出しで、広い階層が重なった五階建て程度のビルだ。

すぐ下の階には下っ端が五・六人ほど見張りをしているらしい。真剣勝負に邪魔を入れない為かとも思ったが、この人数で一人を囲んでいる所を見ればオレを逃がさない為なのであろうと予測できた。

「……下らない」

その一言に逆上したのか、リーダー格の男がナイフを振り上げて斬りかかってくる。

胸を狙った横一文字――というにはあまりにブレたその刃先を、

姿勢を低く踏み出して躱し、足を脚で払ってひっくり返してみれば、既にその男は頭を打ち付けて気絶していた。
「呆気ねーな」
周りの雑魚もあらかたそんな感じで片付けられた。
目の前で見た同じ手を何度も喰らうあたり、マジで学習能力ってもんがないらしい。
まあ、妹を助けるために死に物狂いで鍛えたオレを、こんな惰性の産物なんかと比べられても困るのだが。
麗火を早く探しに行かないと心配で仕方ない。
コツリ、コツリと寒々しい音が反響し、土埃っぽい空気が鼻腔を微かに刺激する。
ないとは思うが待ち伏せに気を払いながら、見張り達のいる下層へ階段を降りて行き、ドアに手を掛けた――否、掛けようとした。
――そこで、このオレですら耐え切れないような寒気が走った。
鼻をくすぐっていた空気に、不意に生温いものが混じる。
いや……これは生温いというよりは生臭い。
……嫌な想像をする。
その想像の中では、千切れた肉片が辺りに飛び散り、部屋中は真っ赤に染まり、淀んだ空気――或いは空間そのものが、自分をその胃袋の中に迎え入れる――なんて、嫌過ぎる妄想。
掻き消すように頭を振って、意を決してドアを開く。
「……っ」
……息を飲み、目を見開けば――
そこには、何もなかった。
なんだ、と心の中で胸を撫で下ろし、ふと目の前の違和感に気づいた。
「……？」
おかしい。おかしいのだ。

何が、ではなく。
どこが、でもなく。
この状況が既におかしい。
だって、何もない。
居るはずの不良達がいない。
“こんなに部屋中が真っ赤なのに”、その原因が、“人間だったモノが一つもないなんておかし過ぎる”。
繰り返して認識する。
“そこには、何もなかった”。
何も、ない。
誰も、いない。
ただ、赤いだけ。
そして。
「……っあ……！？」

いた。
天井から落ちてきて、
天から堕ちてきて、
目の前で血にまみれている、二メートル半の“化け物”。
あかく赤く紅く朱い人の命を、
一つ残らず喰らい尽くしたそれは、
本当に気味の悪いことに、

人の言葉を話した。

『――喰イ足リナイ――喰イ足リナイ喰イ足リナイ喰イ足リナイ喰イ足リナイ喰イ足リナイ喰イ足リナイ喰イ足リナイ喰イ足リナイ喰イ足リナイ――！！』
「……っう、あああああああぁぁ！！！！」
嫌だ、死にたくない！

喰われたくない！
思考を埋めるのはそんな言葉ばかり。
だけどダメだ。コイツに言葉なんか通じない。
人語を解することは、話が通じることとは別モノだ。
捕食者は、餌と意思の疎通なんてはからないのだから――
「うおおおっ！！」
オレの能力は『腕から斬撃を放つ』ことが出来る。
一般には知られていないが、超能力は血統で遺伝する。姉貴はごく短時間の未来予知。妹は聴覚以上の範囲をカバーする読心能力。
オレの場合は、一日に十発前後の斬撃を右手刀から飛ばせる。今日はまだ二発しか使っていないから、残りはおよそ八発。
《不死》の手足を切り取り、あわよくば本体、不可能でも一部は持ち帰る。僅かだがそれで希望はある。
一撃で腕を薙ぎ、二撃目でもう片腕を落とす。三撃目にはまとめて足を奪い、《不死》の化け物は崩れ落ち――たりはしなかった。
またたく間に“再生した”足が床を踏み抜き、それに気を取られた間に、腕は元通りに生えそろっていた。
「ウソ……だろ……？」
恐らくコイツが不死。
だが、こんなふざけた再生能力まで持ち合わせているとは思わなかった。
「っ……《不死》なら死にはしねぇだろ……ッ！！」
賭けに出る。
胴を真っ二つにする一撃。
決して人間には向けたくない威力だが、コイツの固い表面にはやや勢いを削がれる。
持てる最良の手段を尽くしたオレは、
『グ……ギギギギギギギギギギギギギギギギ！！』
時間を稼ぐしかできないという真実と、残りの弾数がない事実、そして愛する妹を救えなかった現実に、心が……折れた。

6.

発端は二年前の暮れ。某県の比良坂市に流れ着いた化け物は、二人の少年を殺戮した。

一人の少年は肉片の一欠片も残さず貪り尽くされ、その親友だったもう一人の少年は、通りかかった《呪術士》に助けられた。規模などではなく、その度合いこそが殺戮と言える惨殺だった。撃退されてからは、その街には一応の平穏が訪れた。

「そして、その後一年ほど目撃が途絶えて……この街で確認された、と」

「《呪術士》って……オカルトでしょうか？　胡散臭いですね……」

「それを《超能力者（あなた）》が言うんですか」

まあ、別に信じてもらえなくても一向に構わないのだけれど。

結局心配になって一緒に公園まで戻ったボクは、周辺でレイカちゃんを探しながら、今さっきまで水季さんから事情を聞いていた。

涼やかな夏の夜風は、頬を撫でて吹き抜けていく。

――三角水季いわく、彼女達の妹は“死に至る病”を抱えている。

現代医療では治療も不可。普段はまるで症状はないのだが、一ヶ月に一度だけ、発熱するというモノらしい。

しかしこれが厄介で、発症するたびに次回の熱が上がってゆく奇病。

つまり、徐々に発熱の度合いが増してくるのだ。

通常、人間の身体は四十二度を越えた時点でタンパク質が変質を始め、正常な生命活動を損なって死に至る。

そしてレイカ――三角麗火ちゃんは、一週間以内に起きる次の発

症でその値に届く。
四十二度。死に。人の死の温度。
だからなんとしてもその前に、《不死》を捕らえてなんとかその不死に縋ろうとしている。
それが、ボクに理解できた話の内容だった。
「だけど無理だよ。やめておいた方が良い」
なんの怨みもないけれど、だからこそ言わなくちゃいけない事がある。いつも真里亜には甘いと言われるし、仕事仲間には心配をかけてばかりだけれど。
いや、だからこそ。
「どうして！？　妹を見捨てるなんて出来ない。この方法しか、私達が縋るものなんてないのに！！」
「どちらにせよ、ボクは《不死》を許せない。あれと同じ方法も、薦められないよ」
妹への愛で切羽詰まっている。だから冷静な思考力が保てない。それは分かる。決して悪い事ではない。……いや、悪い事か。だが、責められるような事では断じてないはずなのだ。
だからこそ、真剣に告げなければならない。
「愛する妹さんの心が、自我が、得体の知れない悪霊みたいな力に犯されて、崩壊しても良いっていうのなら、別だけど。身体も人間のモノじゃなくなってしまうし、記憶も失うだろうと思う。いや、それで済めばマシな方なんだよ」
水季さんを諦めさせるために、少し辛い事を言った。だが、すべて真実だ。
「そんな……」
震えながら呆然とする彼女をみていたら、いつの間にか唇を噛み締めていた。
と、その時だった。
「詩原さん、お姉様！！」
叫びながら公園に駆け戻ってきたのは、ボク達がさっきから探し

ていたレイカちゃんだった。
「麗火！　――無事で良かった……待ってて、って言ったのに……」
水季さんは、名前を呼びながら麗火ちゃんを抱きしめると、「ゴメン……ゴメンね……」と涙を流して謝り始めた。
彼女の気持ちなんてボクには解らない。解るなんて言い始めたらそれこそ酷い侮辱だろうから。妹を救う為の希望を断たれ、絶望の中で愛する家族を失わなければならなくなった、彼女の気持ちなんて、絶対に。
解るはずもないに決まっていた。
「それよりもお姉様、詩原さん、助けてください！」
それよりって……なんか、姉よりも大人びている気がした。
「お兄様が、恐らくは不死に襲われて……やられています」
「――っ！！」
「そんな、風太くんが！？」
そこからはレイカちゃんによる説明だった。
廃墟付近を歩いていたとき偶然にも不良グループの断末魔を心の声で聞き、続いてお兄様――風太くんが、不意打ち気味の襲われ方で戦闘にもつれこんだ事。
助けを求めていたら自分を呼ぶ心の声が聞こえ、ボク達まで辿り着いた事など。
「場所は？」
「××××です。……お願い出来ます？　詩原さん」
「間に合うかは分からない……だけど、行くよ」
すると水季さんは不安だったらしく、「そんな、不良にやられてた貴方じゃ無理よ……お願いだから行かないで……」と言って泣き出してしまった。
心配性な上に侮られている。……当然だった。
涙は苦手なので、少しでも安心してもらおうとカッコつけてみた。
「大丈夫、今回は私怨ですが、本来ならボクはプロです。言ったで

しょう？　アレを殺す為に、ボクはここに来たんだ」
「知らないわよぅ、バカぁ！」
「お、お姉様、落ち着いて！」
……いいや、勝手に行ってこよう。
「……ねえ、貴方。戦闘に、私のサポートは……？」
「いりません。あってもなくても変わりませんから」
また目を潤ませる水季さんと、慌てて慰める麗火ちゃん。
意外と面白い二人……もとい、意外に面白い二人だなぁ。
「もし生きていれば、隙をついて風太くんをお願いします。……それじゃあ、いきましょうか」

7．『比良坂・二年前の冬』

血の惨劇の中で、ボクは彼女に出会った。

「……ねえアナタ、どうしてこんな所で死んでいるの？」
「……」
「――やっぱり《蟲蝼（レギオン）》……人を辞めた呪術士のクズがこの街に入り混んでたのね。あの忌まわしい害虫が。黄泉に似た比良坂には、死に近いモノたちが集まる……お父様の遺言通り、か」
「……キミ、は……」「なによ、まだ生きてたの？　言っておくけど、ワタシはアナタをどうにかしてあげるつもりはないわよ？　手段はあるけど、一生に一度の秘術、アナタごときに使うなんて有り得ない――」
「――キミ、は……どうして、生きているの……？」「――――！！」
「……そんなに、心が……綺麗なまま……生きていけるなんて、キミは……すごいね……」

「ふぅん……少しばかり……気が変わったわ。アナタ、生き返りたい？」
「……？」
「人の世から離れてワタシに服従を誓うなら、ワタシがアナタという存在を貰ってあげてもいいわ。」
「……別に、キミの好きにしたらいいよ。……ボクは、キミのような人間を最後に見れて満足したから……」
「――ふふっ、本当に……なんて愛しい人なのかしら。害虫のせいで最悪な気分だったけれど、意外と世の中っていうのは捨てたもんじゃないのね。ねえ、アナタもそう思わない？　ええと……」
「……」
「あら、もう死んじゃってるじゃない。名前は……目覚めてから聞くしかないわね」
月を見上げ、されど月明かりの届かない闇の底で嗤う少女は、この世の者とは思えないほどに美しい。
「――アナタの名前、イヤというくらいに呼んであげるわ。だから――ワタシの名前を、アナタに好きなだけ呼ばせてあげる――」

ボクと親友が死んだ次の日の朝、ボクは目覚めた。
「――真里亜。マリア。まりあ。真里亜。……うん、覚えた」
「よろしい。じゃあ、アナタのことは詩原くんって呼ぶわね……フフッ」
「アナタの身体の事だけどね、この世の理から断ち切ったの。『藤宮詩原を永遠に殺しつづける』呪いを掛けたから、『殺』した後、死んでいる状態をもう一度『殺』す現象が起きる。でも死んだ人間を『殺』すのは矛盾だから、死んではいなかったことに修正される。これを繰り返して、生死の狭間で留まり続けているの。現世に生き

る人間に接触し過ぎると、常識に引きずられて矛盾が消えてしまう。つまり、アナタ死んじゃうのよ。だから、私みたいな常識に依存しない人外連中としか関われない。ワタシもアナタには死なないで欲しいし、ルールだから、よろしくね？」

「アナタ達を殺して喰らおうとしていた化け物は、《蟲螻（レギオン）》っていうの。堕ちた呪術士が、ああなることがあるみたい……自分の意思で、ね」

「アナタが望むなら――創りましょう。賛同してくれる仲間を集めて、害虫共を殺せるだけのチームを。名前は……《零零零（アイン・ソフ・オウル）》なんて、どうかしら」

そんな昔の夢を、七原に向かう電車の中で見た。

8．『七原廃棄区画・決戦』

後で思い返すなら、この戦いこそが一番呆気ない。

多分、そうなることは予測がついた。

対峙するのはボク一人。

相対するのは虫一匹。

そう、それこそが《不死》。

黒光りした甲殻の、カブトムシのような頭と胴体に蜘蛛の脚。常にサソリのような尾を持ち上げて威嚇している。口には大きな牙が生え、あまりに肉を喰い千切る用途に適しすぎている。

奴は駐車場ビルの屋上にいた。逃げた風太くんがここで防戦を張っていたらしい。彼の能力とこの状況をすり合わせれば、戦意を失って当然なのに。いや――失って尚、修練の通りに身体が動いたの

か。それで十分持たせるとはたいしたものだ。
お陰で、喰われてしまう前に助けることができそうで何よりだろう。
――空には月明かり。満月。十五夜。或いは十六夜(いざよい)。
呼び方はなんでもいい。日光よりは月光の方がずっと楽だ。
『餌……餌ダ……増エタ……ギギ』
――悪いが、ボクはアンタの餌じゃない。
「やあ蟲螻(レギオン)。人を辞めた虫の化け物。　人を殺める害虫風情。良い夜だとは思わないか？　ボクたちみたいな人外が殺し合うにしては、贅沢過ぎるね」
こっちには怨みつらみがたっぷりとある。少しくらいは会話で時間を稼げるだろう。
「ああ、話を聞いてもらうつもりも、聞いてやるつもりも、苦戦するつもりも手加減するつもりもない。ハエを叩くのも殺虫剤を撒くのも、ただの作業であることに変わりはありませんし、ね」
『グッ……ギギ……我ヲ……舐、メ、ル、ナ……』
怒ってる怒ってる。怖い怖い。
「……あの、本当に私のサポートは？」
後ろから話し掛けてきたのは水季さん。これから隙を見て風太くんを救出してきてもらう予定だ。
「うん――大丈夫、要らないよ。反撃を喰らっても喰らわなくても、同じだからね」
「……？」
首を傾げるが、ボクが促して行ってもらった。
さて、もういいか。
「蟲螻さん。一つ、聞かせてください。二年前、殺して喰らった人間を覚えていますか？」
『……貴様ハ、二年前ノ食事ノ色ト盛リ付ケを覚エテ、イルノカ？』
貴様は今までに食べたパンの枚数を……みたいなこと返してきや

がりました。
「そうですか、残念です。まあ、実はどちらにしろ変わらないんですが――」
走り寄り。
「殺させていただきます――いえ、殺して差し上げますよ」
ただ殴り付ける。それだけ。
「君は硬いし、力も強いけど――」
ボクとは相性が悪かったようだ。
「――君の方が動きが遅い」
勢いよく振り下ろしたボクの右腕には、地響きのような轟音が伴った。
常人を遥かに越えるボクの筋力は、いとも容易くコンクリートより硬い甲殻をめり込ませるように叩き潰した。
しかし反動で、ボクの右手は木っ端微塵に砕け散る。
だが――
「――再生もボクより遅い」
甲殻の修復が始まる前に、とうの昔に再生を終えた右拳を叩き込む。
「――君には痛覚もある」
せめてもの抵抗とばかりに放たれた脚は、ボクの右肩に突き刺さる。
だが、二本目が迫る前に刺さったままの脚に構わず右腕を振り上げ、それを根本から引き千切る。
その痛みの所為か昆虫の動きが止まる。
「再生回数にも限界があるらしい」
同じ事を幾度か繰り返せば、千切られた脚はもう生えて来なくなった。
それに対しこちらは、殴り続けた拳も、貫かれた右肩も、既に傷一つない。
つまり、それが意味する所は。

「君は、別に死なない訳じゃない」
「――ッ、グオオオオォォッ！！！！」
死に物狂いに不意を突いた、人を容易く死に至らしめる凶器――
苦悶の絶叫と共に薙ぎ払われた最後の脚は、僕の頭を見るも無残に
砕け散らせた。
ずぶり、と柔らかい側頭部に鋭い甲殻の爪先がめり込む。
ばきり、と頭蓋を砕き、骨片が散弾のように飛び散らされる。
ぐしゃり、と豆腐の中を横切るように、呆気なく脳を両断する。
それから脚は、それらと同じ工程を逆の順序でもう一度繰り返し
て反対側へと到達した。
「――ッ、ぁ……？」
「ギギ……思考出来ナケレバ、再生能力ハ使エナイダロウ……！！
キキ――死ネ、シネ、死ネ死ネシネシネ死ネシネ死死死死シネ死
ネシネ死ネェッ！！！！」
酷く耳障りな声だけど、ボクにはもう何を言っているのかも理解
できない。
――視界が真っ赤に染まったのは、二つの眼球が潰されたから？
そのまま真っ暗になったのは、視神経を引き千切られたから？
もう何も感じられないのは……頭の中を掻き回されたから？
それとも、血を噴き出し過ぎたから？
……徐々に何も考えられなくなってきて。
……そのうちなにもかんがえられなくなった。
そして。
答えを、見つけた。

――――――――ああ、始めからか。

最初から何も変わらない。
痛みも苦しみも生も死も、この世との繋がりさえも。
ボクは初めから持ち合わせていない。

今のボクが生まれた時に捨て去ってしまったから。
ボクは何も感じない。
だからその程度の事、ボクに何の感慨も与えない。何の影響も与えない。
「死ね？　ボクが死ぬって？　――――冗談だろう？」
瞬きもしない間に修復される。どちらにせよ、瞬きは出来ないけれど。
だが、ボクは頭を潰されたって痛くもないのだ。なぜなら既に生物じゃないから。
「安心しろ化け物。アナタはまだ――生き物だよ」
――生ける屍に、致命傷などという概念は存在しない。
ひたすら甲殻の上から殴り続けた所為で、既に化け物は見た目通りの虫の息。
「馬鹿、ナ……嘘……」
人が虫を殺すように、虫の化け物が人の化け物に殺される。
虫にも命が有るんだって？
そんなことは知っている。
でも悪いね、虫を叩くのに罪悪感を感じるほど、偽善の持ち合わせは多くないんだ。
どんな種族の生物だって、自分と仲間に害為す敵には容赦はしない。
「どうやら死者も同じのようだね。……僕も知らなかったけれど。」
虫のように虫らしい虫の目からは、おびただしいまでの絶望が読み取れた。
これが現実？
まるで悪夢だ。
「――いいえ、悪夢のような……現実ですよ」
終わりを告げよう。
「アナタ、頭を潰せば再生しないらしいですね」
それは、この虫自身が言った事。

『思考出来ナケレバ、再生能力ハ使エナイダロウ……！！』
ボクは自身の能力を、ヒントですら明かしていない。にも関わらず、ヤツは確信を持ってボクの脳髄を破壊した。“まるで、何らかの前例を知っているかのように”。
それがボクと同じ存在だったならば、それが有効であるという結論には至らないだろう。先程のように真実、無意味なのだから。
ならば最も可能性が高いのは何か。
そんなの、考えるまでもないだろう。他でも無い本人に決まっている。
違っても構わない。脳が壊れれば思考が一瞬途切れるのは事実だし、そもそもボクにはリスクがない。

――だって、死なないし。

ぐしゃり、と。
随分と呆気ない音を立てて、虫の脳は圧壊した。
それは虫本来の梯子状脳神経ではなく、かつて人間だった頃の名残だった。
「あ……凄い……」
漏れた言葉は誰のものだったか。……少なくともボクではないが。
その時、最近は随分と聞いていない声を聞いた。
「――はーい皆さんお疲れ様でしたー！」
「誰！？」
「どこに居やがる！」
「警戒を怠らないで下さい、お姉様、お兄様！」
以上、上から歳順に三角三兄弟。いや姉妹？　……なんかどっちも違うような。
っていうか、やっぱり一番しっかりしているのはレイカちゃんだと思います。
――全てが終わって大団円的な雰囲気　（なぜか変換できた）の

中、突如として表れた黒服の男。なんかＳＰみたいな格好をしていてバリバリに怪しい糸目男。
「あー。酷いことおっしゃらないで下さいよー、“坊ちゃん”」
「素で心を読まないで下さい、深遠（ふえん）さん」
やっと来てくれたお迎えさん。彼は、真里亜の部下にして呪術結社《零零零》のナンバースリーたる深遠さんその人である。ちなみに、この場合の結社は会社とも言いかえられる。つまるところトラブル解決の派遣会社である。（非公認。ここ大事）
「いえいえー、お嬢様に仕える者として、読心術くらいは一般教養ですって」
「そんな訳ないでしょう！」
「おや、坊ちゃんたら手厳しい」
そんな馬鹿な会話に呆れたのか、驚いたのか。或いは何か勘違いしたのか、水季さんが不思議そうな顔で眺めていた。……なんか恥ずかしい。
「それじゃあ坊ちゃん、帰りましょうか。おっきな車借りてきたんで、そっちの方々もご一緒にどうです？」
「ああ、じゃあついでに事務所に連れていってもいいですか？　積もる話もありますし」
「構いませんって、坊ちゃんが友達連れてったら、きっとお嬢様も喜びます」
「母親か何かですか！！」　はっはっはっ、と笑う深遠さん。それにしてもこの人、良く笑う。
「なあ、藤宮……さん」
そんな周囲おいてけぼりなハイテンションの横から呼ぶ声。風太くんだ。無理にさんなんてつけなくていいのに。
「一応アンタには感謝してるし、借りもある。必ず返すつもりだが、麗火のことが心配だ。あまり馴れ合うつもりは……」
「あーなるほど。深遠さん、依頼人に説明お願い」
「了解です、坊ちゃん。説明義務を果たすのは社員の仕事ですから

！」
ここに来る前にこっそり電話で連絡をとった際に、会社の方には三角さん達の事も話していた。もちろん、レイカちゃんの常識には有り得ないような病気のことも。
「えー率直に言えば、そちらの麗火様のご病気は、我が社で治療可能です。……御依頼下さればすぐにでも」
「本当か！！」
「本当なの！！」
「うわわっ、苦しっ！」
二人に詰め寄られている深遠さんを横目に、レイカちゃんの前にしゃがみ込んで目を合わせる。
「ウチの社長は呪術士でね。受け継いできた独特の薬学は、現代医療では治療不可能な“呪いみたいな症状の病気”を専門で扱うんだ。だからきっと治る。だから――君は死なない。生きてくれ、レイカちゃん」
「私……死なないの……？」
「うん」
何度も。
「死ななくても……良いの……？」
「うん」
何度も何度も。
「本当に？　本当に本当に本当に？　夢じゃ……ない？」
繰り返し、確かめるように。だけど――
「――夢のような、現実だよ」
「……ううっ、……ふぇ、ふえええぇぇん……！！」
安堵で泣き出すほどに、彼女は無理をしていた。幼い少女が死の恐怖に怯え、それでも気丈に振る舞っていたのだ。
こんなに優しい子なのに。
無理をしていなかったはずがないのだから。
「あー！　麗火を泣かせるなー！」

「何！　麗火、何かヘンなこととされなかったか！？」
「え、ちょっと、お兄様、お姉様！？」
「……何気に失礼だね、君達。……まあいいか」
ボクも、親友との約束は果たせたしね。
誰にも気づかれないように呟き、後ろを振り替えって風景を目に焼き付ける。
呪縛から放たれたのは、むしろボクかもしれない。
そう思いながら、みんなの待つ車に乗り込み、ボクらの家まで帰って行くのだった。
これからも、ボクはやりたいことをやって生きていく。
いや、生きていくってのも変か。

だってボクは――

「……いや、口に出すのも陳腐だし、やめとこう」

ちなみにその後紆余曲折あって、《零零零》に新しい社員が三人（内訳、シスコン二名）増える事になったのはまた別のお話。

《ＦＩＮ》

（後書き）

最後適当っぽいですね。
やはり時間が……。
ちなみに、作品中で一度もゾンビって言わないように苦心してみました。
……あれ？　これゾンビ小説なのか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0819o/

『零円の生命』

2010年10月8日11時16分発行